様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２６２５

研究課題名（和文）日本伝統音楽と民族音楽を位置付けた学習理論構築と実践開発―小泉文夫の理論を軸に―

研究課題名（英文）Constructing the learning theory and developing practices in music classes with Japanese traditional music and musics in other countries based on the theory of Fumio Koizumi

研究代表者
権藤　敦子（GONDO, Atsuko）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：７０２８９２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本の音楽と諸外国の音楽の先駆的な研究者であった小泉文夫（1927-1983）の音楽教育論を手がかりに，「自発的創造性」「体験としての音楽」等の小泉の提言を軸として，世界横断的に音楽を捉え，アクティブに学ぶ音楽科授業のありようを考察し，実践開発を行った。
具体的には，
①主体的な音楽活動を通して世界横断的に音楽をとらえていく,②音楽構造の「共通点」と「相違点」をとらえることで世界の音楽の多様性に気付いていく,③そのことにより今までに親しんできた音楽の特徴やよさを音楽構造から見つめ直す，という3つの方向性による学習を提案し，60のユニット，カリキュラムマップ案，88の動画教材の制作を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多様な音楽の特徴を軸に，楽しみながら活動をすることで，子どもたちの「音楽」のとらえを広げ，「音楽」の学び方を広げることが可能になる。音楽を世界横断的にとらえアクティブに経験する学習を通して，世界の音楽に本質的な興味をもつことが，ひいては自分自身の音楽文化を根源から見つめ直すことになる，という循環を生み出す音楽の授業を創造していくことが，真正の学び，深い学びを実現する授業の開発へと結びつく。

研究成果の概要（英文）：Fumio Koizumi (1927-1983) was a pioneer and eminent researcher of music in Japan and other countries. In this project, we examined music from a worldwide viewpoint and proposed activities in music classes based on the ideas of Fumio Koizumi. We developed 60 units of practice, a curriculum map for learning, and 88 YouTube videos, practicing three goals to achieve effective learning in the classroom: (1) to learn proactively with cross-cultural music, (2) to realize diversity in music through finding commonalities and differences in the musical structure, and (3) to recognize characteristics and charms of our familiar music through learning activities with cross-cultural music.

研究分野：音楽教育学

キーワード：小泉文夫　自発的創造性　体験としての音楽　世界横断的　実践開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

平成 29 年３月に新しい学習指導要領が公示された。そこでは，グローバル化する社会の中で，伝統や文化に立脚することがこれから生きていくうえでの重要な資質の一つとして位置付けられている。また，新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育むために，地域の文化や子どもの姿を捉えたカリキュラム・マネジメントの促進と，授業改善が求められている。このような背景において，児童生徒がその教科に固有の見方・考え方を学習や人生において自在に働かせることができるようにすること，学校教育において取り上げなければ出会うことのない教材や経験することのない活動を提供することが学校教育に求められている。

能，歌舞伎，雅楽といった伝統的な古典音楽のみならず，生活の中に存在してきたはずのわらべうたや民謡など民俗音楽さえも，現代の多くの日本人に自文化として捉えられているわけではない(権藤 2015『高野辰之と唱歌の時代』p.12)。公的な音楽として西洋音楽が導入されて以来，「我が国や郷土の伝統音楽」は近代国家形成の過程で学校教育における位置付けを失い，子どもたちにとっても教員にとっても身近なものとはいいがたい存在になっている。加えて，これらの音楽を教材とする実践の多くは，個々の音楽作品の表現，鑑賞の活動を通して音楽の特徴を捉えることを目標としており，伝統や文化に立脚してグローバル化に対応する資質や能力を育む，という視座に立つものではない。さらに言えば，意図的に取り出された「見える文化」だけを切り取って，脈絡なく教材として位置付けるやり方では，子どもたちに偏った文化の「見え方」を伝達してしまう危険がある。

伝統や文化に立脚しながら，異文化を理解し多様な人々と協働できるような資質･能力を育む，という学校教育の課題に応えると同時に，多様な音楽文化の価値と本質に出会い，人生における「見方・考え方」を児童生徒が自在に働かせるようになる深い学びを実現するためには，音楽科において日本の音楽や諸外国の音楽をどう捉え，実践に位置付けるのか。生活の中で大切にしてきた自文化への肯定的な価値観があって初めて，異文化へのまなざしが成立すると言われている（相庭他 2013『日中韓の生涯学習 ： 伝統文化の効用と歴史認識の共有』)。これは，小泉文夫が日本伝統音楽を主軸としながら表明してきた音楽教育観と通底する視点である（小泉 1973『おたまじゃくし無用論』，『音楽の根源にあるもの』1977 他)。

異文化を理解し多様な人々との協働をめざす，社会に開かれた教育課程を編成するためには，個々の音楽を学ぶための教材化や汎用的な概念の獲得だけでは不十分である。自文化を出発点としながら，多様で豊かな音楽文化と子どもを切り結び，永続的な理解を伴う資質・能力を育める授業開発，カリキュラム開発へと向かう視点の転換が求められる。固有の音楽文化の特徴をふまえた，アジアの中の日本，グローバル社会の中の日本，という視点での理論的実践的提案はいまだ十分になされておらず，教育課程の転換期において急がれる課題である。

たとえば，隣り合った２音から音階概念を獲得する，あるいは，無拍，１拍子から拍の概念を獲得するといったことは，生活の中の音，多様な音楽文化においては体感を伴ってうなずける内容だが，西洋音楽から導かれた長音階・短音階や２拍子・３拍子の拍感を所与のものとする中には位置付かない。子どもたちが自文化の萌芽として備えているものを肯定的に価値づけ，異文化へのまなざしを得るように橋渡ししていく方向性，これらは，小泉自身が豊富な言葉で残している学習への示唆の一部であり，そこを軸としながら，理論構築，実践開発を行うことは，今後重視される資質・能力観に対応した学習方策の転換に結び付くと考える。

日本の音楽の学習に関しては，日本学校音楽教育実践学会等で近年意識的に実践が重ねられるようになってきた。また，多文化教育，グローバル時代の音楽教育については，B.ネトルやP.S．キャンベルら海外の研究者からの示唆もある。しかし，明治期以降，独自の音楽文化政策が行われた日本における特異な事情や，日本の伝統音楽の独自性をふまえつつ，諸外国の音楽も視野にいれた包括的な学習の方策については今だ構築されていない。歴史的に長い経緯を経て未解決のまま現在に至っている音楽科の課題に，日本の音楽，諸外国の音楽を切り口にして迫ろうとする点で本研究は独自な取り組みである。

２．研究の目的

本研究では，小泉文夫の理論を軸としながら音楽の捉え直しを行い，多様な音楽文化の価値と本質に出会うことのできる音楽学習理論を構築する。その上で，日本の伝統音楽や世界の諸外国の音楽の学習について実践提案をする。

具体的には，

(1) 音楽教育史研究から導かれる課題と，音楽科教育の現代的課題を明確にする。
(2) 小泉文夫の遺した膨大な業績と記録から音楽観と音楽学習観を抽出するとともに，それぞれの音楽文化の特徴を確認しながら整理する。
(3) 既往の授業実践報告，提案を確認し，体系化するとともに，小・中学校の現場と共同で，教材開発，授業開発を行い，音楽文化に根差した学習の原則を明らかにする。
(4) 検証授業を実施し授業研究から学習の状況を考察するとともに，実践の提案をする。

３．研究の方法

(1) 小泉文夫記念資料室その他の史資料及び文献調査に基づく歴史研究を行う。具体的には，小泉の『日本傳統音楽の研究』(1958)，『わらべうたの研究』(1969) によって明らかにされた日本伝統音楽の理論とわらべうたにおける子どもたちの創造性の発見が，その後の日本の音楽教育にどのように受け止められてきたのか，その実際と限界，その後の小泉理論研究と音楽教育との関係，海外の民俗音楽研究に基づく音楽教育との関係等，明らかにする。

(2) 小泉が昭和 50 年代に深く関わった教材制作事業，教科書制作等，音楽教育分野での社会的な活動について，関係者へのインタビュー調査，教科書制作時期の書き込みや回想等を確認し，その内容についての再評価を行う。

(3) 日本の音楽の骨組みを解明した小泉の音楽理論について，音楽教育の視点から理論的に再検討を行う。とくに，『わらべうたの研究』で示された研究方法と音楽分析の方法は，子どもの音楽習得と関連が深く，小泉理論に基づく授業開発への手がかりを得るべく考察を行う。

(4) 「体験としての音楽」，「第三の視点」を含む三角点で音楽を捉えること等，これまで見落とされてきた音楽学習理論へと結びつく小泉の主張について，文献調査を通して考察し，音楽の習得方法へと具体化する。

(5) 小泉の提唱した，子どもの自文化を出発点としながら，多様で豊かな音楽文化と子ども自身を切り結ぶ教育実践について，その体系化，開発，カリキュラムの検討を行う。

(6) 実践の開発・検証，教材，実践体系化についての報告書の作成を行う。あわせて，学会での発表を通して，日本の音楽と諸外国の音楽を位置づけた学習の理論化の根拠と実践提案を発信する。

４．研究成果

(1) 課題の明確化

1989 年の学習指導要領改訂で，国際理解を深め我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成が提唱され，2006 年の教育基本法改正，2007 年の学校教育法改正を踏まえて伝統と文化を尊重して我が国と郷土を愛する態度を養う方向性が学校教育でも重視されてきた。本研究開始時には，2017 年に告示された学習指導要領において，伝統や文化に立脚しながら，異文化を理解し多様な人々と協働できるような資質・能力を育むことが課題であるとされている。ESD に力が注がれ，続いて SDGs の達成を目指す実践の開発へと意識が高まる中で，様々な課題の解決に地球規模，人類全体という視野で取り組むことが学校教育にも求められているが，文化的多様性の理解についても，また，自文化を理解し尊重することにおいてさえも，音楽科教育で十分に対応できているとはいいがたい。

歴史的な経緯によってそれが妨げられてきたとしても，現代的な課題を学校全体で共有する中で，自らの伝統や文化を尊重しながら他者とわかり合い，ともに生きていくことができるような資質・能力を育むことのできる音楽科教育のありようを実現することが求められている。そこでは，汎用的な能力の育成を目的として音楽を捉えるのではなく，むしろ，教科固有の知識の習得を通して，教科等の本質に関わるもの，教科等ならではの見方・考え方を働かせた活動の充実が必要である。真正な学びの重要性が指摘されるように，子どもたちが音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽と関わり，音楽を自ら経験する中で面白さを感じ，多様な音楽の価値と本質に出会って学びを深めるような授業の開発が今求められている課題である，と考える。

(2) 小泉文夫の音楽教育論の検討

小泉文夫の音楽教育論は，音楽科教育の抱えるこのような課題に対して手がかりを与えるものであると考え，本研究では，文献調査，資料調査，関係者への聞き取り調査，関わった事業内容を中心に小泉の業績の精査を踏まえ，音楽教育論の整理を行った。

『日本傳統音楽の研究』(1958) における理論的な考察，『わらべうたの研究』(1969) における，子どもたちを対象としたフィールドワークの膨大な資料とその研究は，それまで音楽教育に関わった誰もが得られなかった視座から音楽と子どもの関係を明らかにした。また，1960-1980 年代にかけて小泉が関わった事業や教科書への関わりは，世界各地での音楽調査に基づき，日本の伝統音楽・芸能を軸にしながら，アジアにおける日本という視点を明確にし，具体的な教材や映像資料，公演及び交流事業を通して，諸外国の音楽を学校教育に導入する重要な役割を果たしてきた。さらに，『おたまじゃくし無用論』(1973) をはじめとして，あえて音楽教育の領域に踏み込んだ提言を行い，一貫して子どもの自発的な創造性を重視することを提唱してきた。

子どもたちが日常自ら発揮している自発的表現を生かすということは，『わらべうたの研究』が明らかにした教育の方法論上の根幹にかかわる指摘である。また，フィールドワークにおける研究者のスタンスに関わって，それぞれの文化固有の認識に立ち，その体験の中に実態を把握すべきであることをふまえ，「体験としての音楽」の重要性を主張しているが，このことは，自分たちの文化に足場を置きながらも，他の文化の人たちを理解できるような，そういう子どもたちを育てる上で，その音楽がいかに体験されているかを身体で理解し，外側からではなく，自らその音楽と主体的に出会うことの重要性に結びつく。さらに，いかに体験されているか身体で理解すること，すなわち，その音楽が実生活で生きている場面での活動を追体験したり，その音楽の専門家が当事者の体験の中にその実態を把握する過程を追体験したりすることによって，いわばその音楽の本質に迫る理解が促される。単にその音楽を知識や技能として学ぶ，というだけで

はなく，教科等の本質に関わる特質に応じたものごとの捉え方，見方，考え方を働かせた深い学びを実現することにもつながる。

小泉は，「自分たち自身の再発見を通じて他民族への本質的な興味へとつながった場合には，自分たちの音楽文化を根源から見つめ直すという，日本の音楽文化にとってももっとも根本的なものを導くことができる」（『民族音楽の世界』1985 より）と述べている。三角点でものごとを捉える視点も含め，小泉の打ち出した視点から音楽を捉えるには，従来の狭い音楽観ではなく，人の行動として「音楽する」ことを広く捉え，その当事者にとっての意味はそれぞれ異なることを認める文化相対主義に立つこと，その上で，その音楽文化をいかに体験するか，が重要になる。他民族の音楽への本質的な興味をもつことが，ひいては自分たち自身の音楽文化を根源から見つめ直すことになる，という循環を子どもたちの内側に生み出すような音楽の授業を創造していくことが求められている。言い換えれば，「一番おいしい部分を子どもたちに委ね保障していくことをめざした，教科学習本来の魅力や可能性，（中略）教科の本質的なプロセスの面白さ」（石井英真 2022「『真正の学び』とは－学びの深さと重さを追求する－」『学校教育』No.256 より）を追求する授業への接近であるとも言えよう。

小泉自身は具体的な実践方法を提示しているわけではない。しかし，制作された教材やその教育論には 2017 年告示の学習指導要領のねらいに通底する部分がある。さらに，P.S. キャンベルによる World Music Pedagogy とも共通する方向性がある。子どもたちが音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽と関わり，音楽を自ら体験する中で面白さを感じ，多様な音楽の価値と本質に出会って学びを深めることができるよう，小泉の教育論から引き出されるポイントを確認しつつ，実践開発と検証を行った。

(3) 実践開発と検証

子どもたち自身が音楽を体験的に学べる，その音楽の本質に迫ることができる，シンプルでもその音楽の特徴を押さえた活動ができる，なじみのない音楽であっても自分の知っている音楽を手がかりに共通点や相違点に気付くことができる，一つ一つの単位は小さくし，子どもたちに合わせて関連する活動をつないでいくことができる，等の基本的な方針に基づいて，実践開発に取り組んだ。インド音楽，インドネシアの音楽（アンクルン・ジャンゲル），雅楽，長唄（鼓），箏，日本音階等に関わる題材については，各小学校・中学校の協力を得て，実践と検討会を行った。授業の制約の中で，子どもたちがその音楽の本質に迫るにはどうすればよいか検討を重ねた結果，「音楽を世界横断的に捉え，アクティブに学ぶ」という方向を定め，「インド古典音楽の特徴を感じとろう」「自分たちのつくった雅楽《越天楽》を演奏しよう」「教室の楽器でガムラン曲《ベンドロン》を演奏してみよう」「フラメンコのリズム『コンパス』を全身で感じよう」「竹楽器『トンガトン』のリズムであそぼう」「長唄囃子《セリの合方》の大鼓と小鼓の口唱歌を知ろう」「《えかきうた》をつくってあそぼう」「音の高さを聴きくらべよう」「《さくらさくら》に前奏をつけよう」「３つのうたで『沖縄風』を満喫しよう」「ケチャではどうやって『チャッ』をつなげるの」「朝鮮半島のリズムに合わせて《アリラン》を歌おう」「西アフリカの太鼓アンサンブルに挑戦しよう」「サンバのリズムにのって演奏しよう」他，約 60 のユニットの開発を行った。それぞれのユニットには，「ねらい」「ここがポイント」「身に付く力」「展開のヒント」「音楽について」「学習の流れ」他の記述と，譜例，イラストをわかりやすく示すとともに，各ユニットをつなぐカリキュラムマップの提案，そのユニットの意図に即してその音楽の特徴が明確に捉えられるような演奏で構成された動画の制作（YouTube で公開）を行った。共同で開発した 60 のユニットについては，『アクティブに楽しく学ぶ世界の音楽―組み合わせて使える教材ユニット集』として公刊。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計23件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 本多佐保美	４．巻 71
２．論文標題 日本の音楽をアクティブに学ぶ授業プランの提案と検証―雅楽《越天楽》を教材とする「音楽づくり」の授業実践事例―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 91-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大田美郁，加藤富美子，権藤敦子，田中多佳子，本多佐保美	４．巻 52-2
２．論文標題 小泉文夫の音楽教育論から学ぶもの（３）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 音楽教育学	６．最初と最後の頁 74-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加藤富美子	４．巻 49
２．論文標題 総合芸術の魅力と学習の広がり	５．発行年 2022年
３．雑誌名 音楽鑑賞教育	６．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本多佐保美	４．巻 70
２．論文標題 音楽教科書にみる自国の伝統文化のあり方の検討試論 ―インドネシアの小中学校音楽教科書の分析をとおして―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-70-P161	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中多佳子・松下行馬・本多佐保美	4．巻 51-2
2．論文標題 インド音楽を教材とする小学校音楽科授業の提案 ―世界の音楽に目を向けることの利点に着目して	5．発行年 2022年
3．雑誌名 音楽教育学	6．最初と最後の頁 84-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20614/jjomer.51.2_84	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大田美郁	4．巻 52
2．論文標題 自然の音を生かした音楽表現 －音色に着目して－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 小田原短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 153-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤富美子	4．巻 1
2．論文標題 学校における伝統音楽とアウトリーチ・ワークショップ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブック	6．最初と最後の頁 81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤富美子・伊志嶺絵里子	4．巻 1
2．論文標題 オンラインを生かして伝統音楽を現代につなげるー「箏をめぐる現代 ～オンラインで魅せる楽器」を通してー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本とアジアの伝統音楽・ 芸能のためのアートマネジメントハンドブック	6．最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中多佳子	4．巻 1
2．論文標題 実践によせて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 令和３年度教育研究改革・改善プロジェクト生活や社会 との関わりを意識した幼小中の音楽科プログラムの開発」活動報告書	6．最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大田美郁　本多佐保美	4．巻 18
2．論文標題 アジア地域の音楽を教材とする中学校音楽科授業プランの提案 ―小泉文夫の音楽教育論を土台とした授業実践開発	5．発行年 2020年
3．雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	6．最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20614/jjomep.18.0_84	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 本多佐保美	4．巻 69
2．論文標題 ユネスコ・アジア文化センター「アジア地域音楽教材共同制作事業」の再検討　―教材の音楽的特質および傾向分析を軸に―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-69-P91	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大田美郁	4．巻 51
2．論文標題 保育者養成における『表現のための』替え歌づくりの教育的可能性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 小田原短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 193-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大田美郁	4．巻 15
2．論文標題 〈実践報告〉保育者養成における音楽表現としての替え歌創作	5．発行年 2021年
3．雑誌名 田園調布学園大学紀要	6．最初と最後の頁 123-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中多佳子	4．巻 18
2．論文標題 即興演奏の意味と指導法を考える ― 音楽科における北インド古典音楽の教材化に向けて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	6．最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20614/jjomep.18.0_16	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤富美子・和田佳丈・中野宏紀・滝澤みのり・谷口真実子	4．巻 10
2．論文標題 「楽器がつむぐ東アジアの未来」成果と課題（1）ー伝統×現代を生かす若手クリエータの育成ー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東京音楽大学付属民族音楽研究所紀要『伝統と創造』	6．最初と最後の頁 39-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤富美子	4．巻 493
2．論文標題 小浜島の結願祭（郷土芸能探訪43）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 文部科学教育通信	6．最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊野義博・黒田清子・権藤敦子・ツェワン タシ・ ペマ ウォンチュク	4．巻 13
2．論文標題 ブータンのあそび歌ツァンモの実際 ： ハ県ダンチョ村の場合	5．発行年 2020年
3．雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大田美郁	4．巻 51
2．論文標題 小泉文夫の音楽教育論の再検討―諸民族の音楽学習の観点から―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 音楽教育研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 本多佐保美・山田美由紀・志民一成	4．巻 17
2．論文標題 「唄う」と「語る」の特徴を意識した長唄《勧進帳》の授業プランの提案	5．発行年 2019年
3．雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	6．最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20614/jjomep.17.0_84	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 権藤敦子	4．巻 68
2．論文標題 学校教育と民俗音楽文化の関係性（２）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部	6．最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/48459	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中多佳子	4．巻 1
2．論文標題 世界の音楽について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『プロジェクト報告書　京都府市における伝統音楽教育の授業実践の充実を目指して』2019年度京都教育大学教育改革・改善プロジェクト	6．最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 権藤敦子	4．巻 67
2．論文標題 学校教育と民俗音楽文化の関係性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部	6．最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/46754	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤富美子・伊野義博・権藤敦子	4．巻 48-2
2．論文標題 大会報告：学校での音楽の教え方・学ばれ方を再考する―身体化しているもの・していくもの・させていくもの―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 音楽教育学	6．最初と最後の頁 77-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20614/jjomer.48.2_77	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 権藤敦子・田中多佳子・大田美郁・本多佐保美・加藤富美子
2．発表標題 小泉文夫の音楽教育論から学ぶもの（３）―世界の音楽をアクティブに経験する学習へ―
3．学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 加藤富美子
２．発表標題 多文化音楽研究を現代社会に生かす！―小泉文夫の理論を軸に―
３．学会等名 第３回CMM研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 黒田清子・Pema Wangchuk・伊野義博・権藤敦子
２．発表標題 ブータンの土壁つくりうたパチの教材化―授業実践を通して民謡学習の未来を考える―
３．学会等名 日本民俗音楽学会第35回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中多佳子・松下行馬・本多佐保美
２．発表標題 インド音楽を教材とする小学校音楽科授業の提案―世界の音楽に目を向けることの利点に着目して
３．学会等名 日本音楽教育学会第52回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 黒田清子・伊野義博・権藤敦子
２．発表標題 音楽教育における「伝統」観の再考にむけて ―ブータンの「ヘリテージ・エデュケーション」 カリキュラム共同開発からみえてきたこと―
３．学会等名 日本民俗音楽学会第34回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村恵美子・長山弘・権藤 敦子
２．発表標題 小学校音楽科における和楽器学習のカリキュラムの検討ー低学年・中学年の接続を見通してー
３．学会等名 初等教育カリキュラム学会第6回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 権藤敦子
２．発表標題 リレートーク：小泉先生と音楽教育
３．学会等名 東洋音楽学会西日本支部第289回定例研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 本多佐保美・大田美郁
２．発表標題 アジア地域の音楽を教材とする中学校音楽科授業プランの提案　―小泉文夫の音楽教育論を土台とした授業実践開発―
３．学会等名 第50回日本音楽教育学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中多佳子
２．発表標題 学校と社会を結ぶ音楽教育Ⅱ―さまざまな文化にもとづいた音楽活動を教室に！
３．学会等名 第50回日本音楽教育学会大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中多佳子・大田美郁
２．発表標題 世界の音楽の指導法をめぐって―小泉文夫とP．キャンベル―
３．学会等名 日本音楽教育学会第49回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大田美郁
２．発表標題 アンクルンを用いた授業実践の可能性―インドネシアの歌「ジャンゲル」と合わせる試み―
３．学会等名 日本音楽教育学会第49回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤富美子・伊野義博・権藤敦子
２．発表標題 学校での音楽の教え方・学ばれ方を再考する―身体化しているもの・していくもの・させていくもの―
３．学会等名 日本音楽教育学会第49回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山田美由紀・志民一成・本多佐保美
２．発表標題 ことばと声に着目した日本伝統音楽の指導法と教材開発研究（４）―「唄う」と「語る」の特徴を意識した長唄《勧進帳》の授業プランの提案
３．学会等名 日本音楽教育学会第49回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤富美子・伊野義博・権藤敦子
２．発表標題 音楽教育の原点をとらえる―フォークロアの現代的意義から―
３．学会等名 音楽教育史学会第21回大会(通算第31回）（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 田中多佳子（編著)・大田美郁・加藤富美子・権藤敦子・本多佐保美（著）	４．発行年 2023年
２．出版社 音楽之友社	５．総ページ数 160
３．書名 〔音楽指導ブック〕アクティブに楽しく学ぶ世界の音楽―組み合わせて使える教材ユニット集	

１．著者名 権藤敦子（代表）・大田美郁・加藤富美子・田中多佳子・本多佐保美	４．発行年 2023年
２．出版社 広大生協プリントサービス	５．総ページ数 119
３．書名 音楽を世界横断的にとらえアクティブに経験する学習へ―小泉文夫の音楽教育論を手がかりに―	

１．著者名 伊野義博・黒田清子・権藤敦子	４．発行年 2022年
２．出版社 日本・ブータン民俗音楽研究会	５．総ページ数 549
３．書名 ブータンの遊び歌　ツァンモの研究―21.5世紀音楽教育への序章―	

１．著者名 本多佐保美編著	４．発行年 2020年
２．出版社 開成出版	５．総ページ数 107
３．書名 日本音楽を学校でどう教えるか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　富美子 (KATO Tomiko) (30185855)	東京音楽大学・音楽学部・客員教授 (32646)	
研究分担者	田中　多佳子 (TANAKA Takako) (70346112)	京都教育大学・教育学部・教授 (14302)	
研究分担者	本多　佐保美 (HONDA Sahomi) (90272294)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	大田　美郁 (OTA MIka) (20861644)	小田原短期大学・保育学科・専任講師 (42705)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関